

前回(6月号)では、ブラジルの地方都市の広場に浸透していた「読み聞かせの文化」(以下「読み聞かせ」と略す)に対するダニエル・パリッシュ・キダーの見解を述べた。キダーはこうした文化を全面的に批判してはいないものの、より啓蒙的で体系的な学校教育の必要性を訴えた。これは、彼のいう「知的な人々」、すなわち専門的技術者層の育成を視野に入れた主張であったと考えられる。しかし実際には、広場での読み聞かせは単なる情報発信の場ではなく、人々の能力・知識・感性を育む重要な場でもあった。読み聞かせの社会的・宗教的機能

ここでは、読み聞かせの役割を明確にしたうえで、あえてこの文化がもつ社会的意義に注目したい。

まず、広場に集まる人々は互いに文盲であるという共通認識を有しているため、その間で自ずと文化的共同性が形成されやすく、それが結果としてより自覚的な連帯感の強化につながるといえる。とりわけ、この一連の過程は黒人奴隷の間で顕著に見られる。

本来、読み聞かせは人々の識字能力の問題を緩和する手段として導入されたものと解釈されるが、黒人奴隷にとっては、それが隷従からの解放や自由の獲得へと向かう道標となりうる、いわば僥倖でもあった。読み聞かせの場面では、前回の記事で述べたイギリスの奴隷制廃止論や「マレー反乱」のような奴隷反乱、それに関連する法律・条約などの情報も、非公式に発信されていたのである。

ブラジルの教育史に詳しいマリア・クリスティーナ・コルテス・ヴィッセンバッハ(Maria Cristina Cortez Wissenbach)は、ブラジル南東部における読み聞かせの語りに注目し、奴隷制廃止論者の新聞(jornal abolicionista)の情報が広く流通していたと指摘している。そしてそれらの情報は、火花のごとく当地の奴隷農園へと拡散していった⁽¹⁾という。

こうした廃止論に関する情報はより内密に伝達されていたため、当然のことながら、白人であるキダーがこれを知る術はなかった。しかし、彼自身が奴隷制批判の立場にあったことを踏まえると、仮にこれらの実態を知っていたとすれば、読み聞かせに対する見解は変化していた可能性がある。

なお、読み聞かせがキリスト教文化の浸透においても重要な役割を果たしていた点について付言しておきたい。例えば、米国の「形のない教会(Invisible Church)」⁽²⁾として知られる奴隷たちの秘密集会では、「聖書物語」「讃美歌」「説教」の読み聞かせが行われていた。また、ブラジルの「逃亡奴隷の集落(quilombo)」においては、主として「聖書物語」の読み聞かせがなされていた。とりわけ後者は、アフリカの多様な地域社会・言語集団の出身者によって構成されていたため、読み聞かせは共通語としてのポルトガル語習得と並行して、民族的・言語的差異の融解にも一定程度寄与したと考えられる。

キダーの宣教活動とその歴史的意義

こうして、読み聞かせの一側面に注目したが、ここではキダーの宣教活動における特筆すべき点を取り上げたい。すでに2025年10月号で述べたように、彼は「聖書文書頒布者(colporteur)」として、旅先で出会った人々にポルトガル語の聖書を配布していた⁽³⁾。周知のように、カトリック教会はブラジル社会に多大な影響を与えていたが、実際には聖書そのものは人々の間でほとんど流

通していなかった。それどころか当時は、ラテン語の聖書に基づいて司祭がカテキズムを行っていたため、聖書へのアクセスは識字の問題を超えた制約を伴っていたといえる。このような状況のなかで、ポルトガル語訳聖書の頒布にコミットしたキダーの試みは注目に値し、後のアメリカ人宣教師に先鞭をつけたものとして評価できる。

キダーはあるブラジル人政治家の帝国議会における発言を引用しながら、次のように述べている⁽⁴⁾。

ある著名なブラジルの政治家は、帝国議会において次のように述べた。

「ブラジル国民の文明化についていえば、残念ながら、ほとんど何もなされてこなかった。文明の恩恵を享受しているのは海岸沿いの狭い地域だけであり、内陸部では、我々の国民の大部分は、依然として深刻な野蛮状態に置かれている。」

さらに、この発言に続けて彼は次のように付け加えた。

「我々はこれまで何も成し遂げることができなかった。そして、道徳心と知性を備えた聖職者の助けなしには、何事も達成することはできない。」

このような簡潔で的確な発言にもかかわらず、教育という観点から見れば、ブラジルにはなお大いに希望の余地がある。

キダーは、国内の「知的な人々」が「文明化」に寄与しようと考えていたが、同時に国民の将来を憂慮する政治家の発言を通じて、ブラジルの「文明化」には聖職者による「道徳心」と「知性」の涵養が不可欠であると認識していたと考えられる。つまり、彼がこれまで論じてきた「カトリック信徒の無知」「読み書きの統制」「奴隷制」といった諸問題の解決には、いわば救世主のような指導者が先頭に立ち、それらの問題に対処しつつ人々を牽引する必要性があると彼は捉えていたのではないだろうか。

こうした問題がいずれ克服されるという彼の展望は、「ブラジルにはなお大いに希望の余地がある」という言葉に端的に表れているといえよう。そして彼が語る「希望」は、30年後の1860年代にブラジルへ移住したアメリカ南部出身の宣教師によって具体化されることになる。この点については、本連載の後半で扱うことにする。

今回は、2人目の宣教師ジェームズ・クーリー・フレッチャーについて見ていくことにする。

[註]

- (1) Maria Cristina Cortez Wissenbach. "Letramento e Escolas". *Dicionário da Escravidão e Liberdade: 50 Textos Críticos*. São Paulo: Companhia da Letras, 2018, pp. 295-296.
- (2) 「形のない教会」とは、アメリカ南部の奴隷制社会において、奴隷たちが白人の監視を避けながら森や小屋などに密かに集まり、独自の礼拝や祈祷会を行った非公式な宗教共同体を指す。
- (3) Bruno Gonçalves Rosi. "Political Aspects of the Early Implantation of Protestantism in Brazil". *REVER: Revista De Estudos Da Religião* 18 (2), 2018, p. 203.
- (4) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 2. London: Wiley & Putnam, 1845, pp. 395-396.